



Data

監督・脚本: ロベール・ゲディギヤ
ン

出演: アリアヌ・アスカリッド/
ジャン＝ピエール・ダルッサ
ン/ジェラルム・メイラン/
ジャック・ブーデ/アナイ
ス・ドゥムースティエ/ロバ
ンソン・ステヴナン

👁️👁️ みどころ

藤元明緒監督の『海辺の彼女たち』（20年）は、雪に覆われた青森の寒々とした海辺を舞台に、日本にやって来た3人のベトナム人の若い女性技能実習生の物語だった。しかして、『海辺の家族たち』と題された本作の舞台は？3人の兄弟妹は？

美しい入り江にある「La Villa」で突然倒れた父親の元に、3兄弟妹が久しぶりに集まったが、3人の人生はこれまでバラバラなら、これからもバラバラ。“フランスのケン・ローチ”と称されるロベール・ゲディギヤン監督は、そんな現実を淡々と描いていくが、「La Villa」でのさまざまなエピソードや、3人の難民の子供達を発見したことによって、いかなる変化が？

難民は解決策の難しい大問題だが、三者三様の人生観が変われば、ひょっとして大人達にも難民たちにも新たな希望が・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■なぜ “フランスのケン・ローチ” と呼ばれるの？■□■

私はロベール・ゲディギヤン監督を『キリマンジャロの雪』（11年）（『シネマ29』10頁）ではじめて知ったが、同作を観て、ロベール・ゲディギヤン監督が“フランスのケン・ローチ”と呼ばれていることに納得した。日本では今ドキ、“労働組合”なるものはほとんどその社会的意義を失っているから、その委員長の価値も低いが、同作ではそれが大きな意味を持っていた。また、人権意識の強い西欧諸国では、新型コロナウイルス対応を巡っても、あらゆる面で機能不全としか言いようのない日本と違い、意思決定に至るまでの討論に合理性があるから、その討論を聞いていると面白い。

本作は、「父親が倒れた」との報に接し、急遽父親の「La Villa」（別荘）に集まった3人の子供達が織り成す物語だが、彼らの会話にも“労働組合”とか“共産主義”とかの言葉

が混じってくるから、なるほど、なるほど……。これが“フランスのケン・ローチ”と呼ばれるゆえんだが……。

私が出資金の一部を負担した藤元明緒監督の『海辺の彼女たち』（20年）『シネマ48』（135頁）は、雪に覆われた青森の寒々とした海辺が舞台だったが、『海辺の家族たち』と題された本作の舞台は、どこの海辺？また、『海辺の彼女たち』はベトナム人の若い女性技能実習生3人の物語だったが、『海辺の家族たち』に見る3人の家族とは？

■□■本作のテーマは？原題 vs 邦題の比較も！■□■

『キリマンジャロの雪』の舞台は、フランスの港町マルセイユだった。それに対して、本作の舞台は、マルセイユ近くにある海辺の別荘地だ。マルセイユは大都会だが、本作の別荘地メジャンは、かつては華やかだったそうだが、今はすっかり寂れ、住人もほとんどいなくなっている。冒頭に登場する入江は、空と海を一望できる美しいものだし、それを見渡す別荘の2階にある扇形のベランダは、建築当時から自慢の出来だった。したがって、そんなベランダの椅子に座ってタバコを吸ったとたん倒れてしまった父親も、それなら本望？父親はきっとそう思っているし、家業である小さなレストランを継いでいる長男のアルマン（ジェラルド・メイラン）もそう思っているはずだ。

しかし、パリに住み、人気女優として忙しい毎日を過ごしている末娘のアンジェル（アリアヌス・アスカリッド）にとっても、物書きだったが、今はリストラされ、若い婚約者ヴェランジェール（アナイス・ドゥムースティエ）からも捨てられそうになっている次男のジョゼフ（ジャン＝ピエール・ダルッサン）にとっても、今回の事態はやむを得ないとはいえ、鬱陶しい話だ。とりわけ、この別荘で起きた“とある事故”によって、1人娘を失ったアンジェルは、以後この別荘地とも、父親とも一切の縁を切っていたから、今回もさっさと3人の兄弟妹で遺産分割の話をまとめてパリに帰るつもりらしい。

そんな本作だから、『La Villa』という原題に納得。もっとも、『海辺の家族たち』という邦題も、本作の本質をついているからオーケー！本作では入江の景色の美しさと3人の兄弟妹の織り成す人間模様を比較検討しながら、しっかり味わいたいが、さて、本作のテーマは？

■□■隣人の死亡は？恋模様の展開は？そこに見る希望は？■□■

本作は久しぶりに「La Villa」で再会した3兄弟妹の、遺産分割を巡る対決の物語にすることも可能。しかし、“フランスのケン・ローチ”と呼ばれるロベール・ゲディギャン監督の狙いはそうではなく、ラストにはその逆の結末に導いていくのでそれに注目！

さらに、本作では隣人の老夫婦の死亡は？この恋模様の展開は？という2つの面白いエピソードが描かれるので、それにも注目！ かつては大勢の人が集まっていたこの「La Villa」も、今は住人はほとんどいない。しかし、隣人のマルタン（ジャック・ブーデー）・スザンヌ夫妻はここで天寿を全うするつもりらしい。都会で成功している1人息子のイヴァンは今、そんな両親の「La Villa」を訪れ、金銭的支援をしたいと申し出ているが、両親は

なぜかそれを拒否。その結果、あっと驚く結末になるので、それはあなたの目でしっかりと！

同じように、全く予測のつかない展開を見せるのが、地元で漁師をしている若者バンジヤマン（ロバンソン・ステヴナン）が、地元出身の女優アンジェルにかねてから持っていた熱い思い（？）を打ち明けていく物語。息子ほど年の違うバンジヤマンからのアプローチにアンジェルはビックリ。1度はそのしつこさにブチ切れてしまったが、さて、その後は？ロベール・ゲディギャン監督はラブストーリーは得意ではないはずだが、苦手でもないことは、あっと驚くそのハッピーエンドを見れば十分納得できる。そんなちょっと変わったラブストーリーの展開も、あなた自身の目でしっかりと！

■□■ 3人の難民の子供達を発見！そこに見る希望は？ ■□■

前記2つのエピソードはあくまでサブストーリーで、本作後半のメインストーリーは3人の難民の子供達の発見になる。本作は、前半でも中盤でも警察官（軍人？）がアルマン達の「La Villa」を訪れ、近くの海に漂着した難民について聞き取りをするシークエンスが登場するが、そこでの会話は“フランスのケン・ローチ”たるロベール・ゲディギャン監督の特徴が顕著だから、それに注目！

アルマン達兄弟妹は、黒人である警察官を差別しているの？そんなことはないはずだが、難民の入国を水際で取り締まっている警察官と、「La Villa」に住む民間人であるアルマン達の間で、なぜこんな小難しい議論が交わされるの？難民の姿など1度も目にしていないアルマン達が「見ていない」と答え、さらに「見つけたらすぐに通報する」と答えたのは当然だが、もし難民を発見したら、ホントにすぐに通報するの？それとも・・・？緊急事態宣言、まん延防止等重点措置下の日本では、営業時間制限、酒類の提供制限等、さまざまな規制を受けた飲食店への“見回り隊”が“活躍”しているが、私はそんなバカバカしい制度には大反対。したがって、もし私が違反している飲食店を見つけても、それを当局に通報するつもりは全くない。ひょっとして、それはアルマン達も同じなのでは？そう思っていると、案の定・・・。

本作はラストに向けて、山の中で2人の幼い弟の面倒を見ている女の子をアルマンとアンジェルが発見。怯える3人の子供達を「La Villa」まで連れて行き、お風呂に入れ食事を与えるが、そこにやってきた警察官に対する彼らの回答は・・・？難民問題は極めて難しい問題だが、本作のそこに見る希望は？

■□■ あくまで前向きに！三者三様の人生の選択は？ ■□■

本作冒頭に見るアンジェルの苛立ちを見れば、アンジェルは1日も早くこの「La Villa」からパリに帰り、本来の仕事に戻りたいことは明らかだ。「遺産を3等分せず、アンジェルの取り分を多くする」という遺言は、父親がアンジェルの子供の死亡に責任感を感じているためだが、アンジェルにはそんな“気遣い”は逆に迷惑らしい。そのため、何度も「3等分にして！」と叫んでいたから、それなら遺産分割は容易だ。また、執筆の仕事に行き

詰り、若い彼女であるヴェランジェールからも見捨てられようとしている次男のジョゼフも、こんな「La Villa」で人生を過ごすつもりは全くない。それに対して、長男のアルマンは今後も「La Villa」で小さなレストランをやっていくつもりだし、今後も1人で父親の介護をすることに何の不满もない。したがって、この3人の兄弟妹間の遺産分割の話がまとめれば、それで3人の再会はおしまい。再び三者三様の人生が別々の舞台で始まるはずだ。

本作では、隣家の老夫婦のエピソード、アンジェルとバンジヤマンの恋模様とのエピソードとともに、3兄弟妹の間にこれまで滞留していた(?)さまざまな“葛藤”が描かれていくが、その中で生まれ広がってくる三者三様の“心の揺れ”とは?本来、3人の人生は三者三様のバラバラのもだったが、3人の難民の子供達を発見し、その保護の必要性に目覚めていく中、三者三様の新たな人生の選択は?

3人の難民の子供たちを当局に突き出したら、彼らの未来が失われてしまうのは必然。しかし、仮に3兄弟妹が、この「La Villa」で、3人の難民の子供たちの面倒を見ることになれば?そんなことが現実に可能なのかわからないが、そんな前向きな姿勢を持てば、3人の子供たちの人生も、3兄弟妹の人生も、ひょっとして前向きに・・・?

もちろん、それもハッキリわからないが、ロベール・ゲディギャン監督が本作で描く静かなラストには、そんな希望も・・・。

2021 (令和3) 年7月12日記